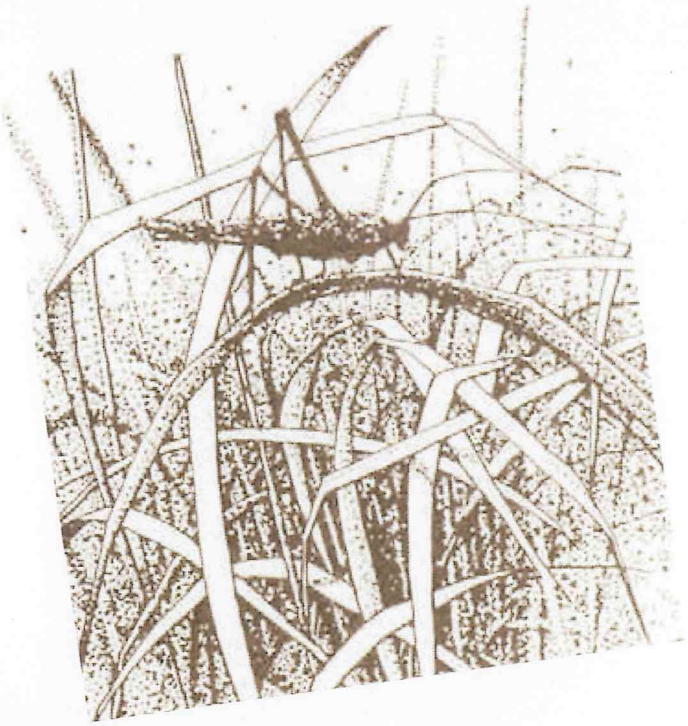
いわみざわの民話



いわみざわの民話
昭和46年、故 奥保さんが初めて民話集として発行した後、5人の執筆者により書かれていた民話の散逸防止のため、平成9年に73編を一冊にして発行したものです。
岩見沢市立図書館で閲覧できます。

今月から私たちのまち岩見沢に、昔から語り継がれてきた民話を紹介する新シリーズ、「いわみざわの民話」が始まります。
玉泉園物語や雨読橋物語など、今も残る地名を題材にした民話から、皆さんに永く語り継がれてきた昔話までを紹介していきます。
挿絵、カットは宮川美樹さんによるもので、本から複製しました。

第1回

玉泉園物語

いまの中央通りは子どものころ夕張通りと呼ばれていた。この夕張通りについてはこんなことが語られている。その昔ここは鹿道（しかみち）といって、鹿の通る細々とした道であった。その鹿道をどこまでも歩いてゆくと、着いたところが夕張だったという。それで夕張通りという名がでてきたわけである。いまはマチの中の中央通りとして栄え、そのはずれからの山道はまだいくらか夕張通りの面影をとどめているといえるだろうか。

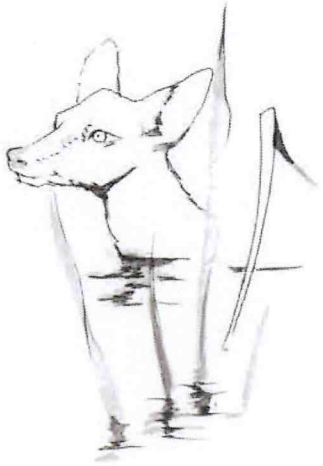
その入り口のあたりに玉泉園がある。昔はこのあたりの山間にかけて、キジやハトや鹿がいた。みんな平和な暮らしをしていたようだ。いつかアイヌが住みつくようになり、狩猟好きなアイヌのえじきになることが多かった。そのためにうたれて傷つく動物が多く、神さまはこのこ

とを悲しまれ、それらをいやしてくれるわき水を与えてくれた。このわき水が鉱泉で、これをわかして静養の場所としているのが、いまの玉泉園である。

ところで、ある日のことであった。よたよたと傷ついた一匹の鹿が、この水のあたりにやってきて、二三日ばかりはほとんどここで過ごしていた。鹿は傷ついたからだを水にひたして、みずからをじっくりといやしているのだった。ひとりの若いアイヌが、この鹿の後をつけてたけ高いささむらからすっかりそのようすをのぞいてしまった。

数日もすると、この鹿はもうまったく元気になったらしく、いきおいよく立ち上がって、ささむらをかきわけるようにして去ってしまった。そして再びそこには姿を見せることはしなかった。若いアイヌは、このことを大人たちに話して歩いた。アイヌたちはその不思議な水をたずねてそれがただの水でないことを知った。アイヌたちは、傷ついたとき、疲れたとき、ひそかにその水がどんなに役立つかを試してみた。

神さまの恵みは与えられた。アイヌに新しい知恵が生まれた。恩恵を受けることだ。これをのがすことはできない。そう思った。ところが、このことは、ここを通る旅人の目にもとまった。不思議な水は、すぐひとびとのこころをひいた。経験ゆたかな旅人は、それがどんな水か、それがどんなことに役立つかを直感した。こうしてわき水はしだいにささやきを大きくしていった。やがて旅人によってわかされるようになった。つまり温泉として使われるようになったのである。



不思議なわき水は温泉にかわった。わかすことによっていっそうの効用を高めた。キジやハトや鹿の神さまの水は、人間によってたくみに利用されることにより、そこには誰がこしらえたか、旅人のためのかりの宿泊小屋もでき、ゆっくりとその旅情を慰めることも可能になったのである。

それからまた年月が流れた。時は惜しみなく人間の世界を、そしてその環境を変えていった。玉泉園はそうした現在の顔である。いまはいわみざわの静養地として、またいこい、健康なレジャーの場所として、多くのひとから愛され、親しまれている。

第2回は「熊射ち物語」を紹介します。

発行・編集　岩見沢市総務部市民活動課

ひとの動き　平成22年2月28日現在

●住民基本台帳	人　口	総数 90,837 人（前月比－71）
		男 42,708 人（前月比－37）
		女 48,129 人（前月比－34）
	世帯数	42,237 世帯（前月比－14）

岩見沢市役所
〒068-8686 北海道岩見沢市鳩が丘1丁目1番1号
☎0126-23-4111　FAX 0126-23-9977
ホームページ　http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp
▶救急当番医ガイド　☎0126-23-5153
▶消防テレホンガイド　☎0126-24-0119

この広報紙は道産間伐材配合紙を使用しています。